黒豹注意報 1

～新米OLタンポポの受難!?～

Yuka & Kazuma

京みやこ

Miyako Kyo

エタニティ文庫

もくじ

身長差 34 センチの出逢い 5

大切なモノ 159

想いの行方 227

愛しき花の手折(たお)り唄 309

書き下ろし番外編
指輪と涙とあなたの名前 325

身長差34センチの出逢い

1　愛され社員は百五十三センチ

「それでは、以上でインタビューを終了いたします。ありがとうございました」

ここは日本最大手の某文具メーカーの会議室。ちょうど、海外事業部部長へのインタビューを終えたところだ。

私、小向日葵ユウカは赤瓦短大卒業後新卒で入社し、総務部広報課に配属された社会人一年目の二十歳。就職難のこの時代に、私がこんな大企業に就職できたなんて、まさにミラクルだ。

学歴が素晴らしいわけではないし、容姿が優れているわけでもない。……おそらく一生分の運を、就活で使い果たしただろう。

入社面接のとき、「この会社に就職したら、あなたはなにがしたいですか?」と面接官の一人に訊かれたことを思い出す。

そのとき私は「日本一の社内報を作りたいです!」と胸を張って答えた。

なにしろ、私は新聞部出身なのだ。

採用の決め手となるような答えではなかったかもしれないけれど、面接官をしていた一人の男性が興味を示してくれた。

彼は、異常なくらい綺麗な人で、「どんなことであれ、『日本一』を目指す心意気が素晴らしい。君、採用ね」と言った。なんとその超絶美形が、社長だったのだ。

前社長が急逝し、跡を継いだ社長はまだ三十歳そこそこ。

でも、人を見る目と先を見通す力は確からしい。彼が四年前に跡を継いでから、この会社は不況知らずで、右肩上がりに業績を伸ばしている。

安定した企業に就職できたし、仕事は楽しいし、毎日が充実していた。

これで素敵な彼氏でもいれば文句無しだが、残念ながら彼氏はいない。というか、これまでの人生で彼氏と呼べる人は一度もいたことがない。

中学、高校は一貫制の女子校で、短大も女子ばかりだった。そういう環境で育ってきたから、男の人はちょっと苦手だ。男性恐怖症とか、男性不信というわけではない。ただ、男の人との接し方が分からないのだ。

――でも、焦ることないよね。そのうち、彼氏くらいできるよ。恋愛経験ゼロの私があれこれ考えたってどうにもならない。なるようになるさ!

寂しくなると、そう自分に言い聞かせている。

総務部に戻り、録音したインタビューを聞いていると、ポンと右肩を叩かれた。七歳上で同じ部の中村留美先輩だ。

「タンポポちゃんが担当になってから、けっこう社内報の評判いいよ。さすが赤短の新聞部出身だね」

『赤短』とは『赤瓦短期大学』の略称で、私の母校だ。数多くのジャーナリストを輩出している有名な新聞部があり、私もそこに所属していた。

けれど私は、ジャーナリストを目指していたわけではない。祖父の形見である一眼レフカメラを使いこなせるようになりたくて、新聞部に入部したのだ。

そして部活動の中で記事を書くことの楽しさも覚えた。その経験を活かして、社内報を作りたいと思ったのだ。

今の世の中、たいていの企業は社内報などに力を入れない。

でもこの会社は現社長になってから、社内報が重要な位置を占めるようになった。社員の声を掲載して情報を共有すれば、社内環境の快適化につながるとの考えのようだ。

私は有名新聞部出身ということに加えて、妙なガッツを買われ、広報課に配属されて社内報を担当することになった。

社内報の編纂以外に、商品カタログのキャッチコピーや写真撮影も任されている。

ちなみに『タンポポちゃん』というのは、私のニックネーム。

『小向日葵』という苗字を聞いた留美先輩に、『小さいヒマワリかぁ。じゃあ、黄色くって、ヒマワリより小さい花ということで、タンポポちゃんだね』と言われて以来、私はそう呼ばれるようになった。

「学生時代にみっちり仕込まれましたからね。これからも頑張って、社員に愛される社内報を作りますよ！」

気合いの入った返事をしたら、留美先輩に優しく頭を撫でられた。

「愛され社員のタンポポちゃんが作る社内報だもの。そのうち、社員全員が愛読するようになるわ」

『愛され社員』なんて言われるのは恥ずかしいけれど、四大卒が大半を占める社内で、短大卒の私はほとんどの人より年下だ。そのせいか、みんながマスコット的に可愛がってくれる。

二十歳になってもなんだか子供っぽくて、そのうえ百五十三センチというちんまりした身長。おまけにちょっと「ぽっちゃりちゃん」に見える私。

――でも、私は標準体重だから！　他の女子が痩せすぎなんだよぉ！

「愛されているというか、子供扱いされている気がするんですけど……」

ションボリと肩を落としていると、横からスッと手を差し出された。
「まぁまぁ、これでも食べて元気を出しなさい」
キャンディーをくれたのは総務部部長。御年五十三歳。この人、顔がメッチャ怖い。
初めて見たときは、本当に焦った。『どうして会社に「ヤ」のつく自由業の人がいるの!?』と思ったくらい、迫力のある顔立ちなのだ。
「小向日葵くん、甘いものが好きだろう。遠慮はいらないよ、さぁ」
「は、はい」
こんなふうに、入社以来、おじさま方がやたらとお菓子をくれるのだ。
もう、私は小さな子供じゃないってのに。……くれるものは、しっかり貰っておくけどね！

2　美形な黒豹、登場

貰ったキャンディーを口に放り込み、デジカメで撮った写真に目を通し始めた。
仕事で使うのはこの最新式カメラだ。でも、私の本来の相棒は、自分でピント合わせをしなければならない、祖父から受け継いだ旧式の一眼レフ。

『そんなカメラ、いちいち面倒くさくない？』
よく人からそう言われる。でも、ぼやけていた景色のピントが徐々に合い始め、そしてパッとクリアになる瞬間がたまらない。この感覚はオートフォーカス機能が標準装備されたデジカメでは、味わえない。
「写真はこれでＯＫ！　午後は社長にインタビューだね」
卓上カレンダーでスケジュールを確認する。
社内報には毎月、社長インタビューを載せており、来月分は今日の午後イチに取材のアポイントをとっていた。
「さっさとお昼ご飯を済ませておこう！」
私はデジカメを机の引き出しにしまって、席を立った。

昼食を済ませた私は、デジカメとボイスレコーダー、筆記用具を手に社長室に向かう。
社長室はだいたいビルの最上階にあるものだ。でも我が社の社長室は一階にある。
『上でふんぞり返っていては、社の動向に目が行き届かない』
それが社長の考えらしい。
今やこの会社は日本を代表する文具メーカーに成長した。そんな企業の社長なら、本当はすごく偉いはずなのに、本人はぜんぜん偉ぶっていない。私のへんてこな志望理由

を聞いて採用してくれた、ちょっと風変わりな社長だ。
そのうえ、超絶美形。
フランス人の血が四分の一ほど流れているせいか、鼻筋がスッと通っていて、色素が薄く、明るい茶色の髪と瞳をしている。肌も白いから赤い唇が目立ち、それがなんともセクシーだ。
そして、経営のセンスは言うことなし。この世の奇跡とも言える存在が会社を治めている。
そんな社長のインタビューページは、女子社員から絶大な支持を得ている。中でもみんな、インタビューと一緒に掲載される社長の写真を楽しみにしているのだ。写真が趣味の私としては、「任せてくれ！」とモチベーションが上がる。
今日もバッチリいい写真撮るぞ～♪　お～！
意気揚々と社長室の扉をノックする。
「はい」
落ち着いた返事のあと、静かに扉が開いた。
「小向日葵さん、こんにちは」
私を迎えてくれたのは、社長第一秘書兼ＳＰの竹若和馬さん。社長には第三秘書までいるけれど、社長室にいるのは竹若さんだけ。彼は身長が百八十七センチあるらしく、

私がこの人と接するときは、思いきり見上げなければならない。
竹若さんは、いつもダークカラーのシックなスーツに身を包み、黒髪が切れ長の目にかかる様子が色っぽい和風美青年だ。その艶っぽさから、女子社員は彼を『現代の光源氏』と呼んでいる。
けれど、私は光源氏だとは思わない。しなやかな体躯、理知的な瞳、ダークカラーのスーツ、綺麗な黒髪から、『黒豹』みたいだと思っている。
そうそう。誤解のないように言っておいた方がいいかな。竹若さんは決して光源氏のように、女たらしではない。恋愛に関してはものすごいストイックで、言い寄ってくる女子社員をつまみ食いすることなんて絶対ないと聞いている。付き合っていた彼女と大学卒業時に別れて以来、ずっと仕事に打ち込んできたのだとか。
今は特定の彼女はいないらしい。で、女子社員たちが彼の恋人の座を巡って、水面下で熱いバトルを繰り広げているとのこと。これは竹若さんと同じ大学出身で、さらに同期入社の留美先輩が教えてくれた。
そういえば留美先輩が、『男のくせに、艶めかしいあの鎖骨は罪よね』と言っていたっけ。
羨ましいほど色気の溢れる竹若さんだけど、ただの優男ではない。剣道五段の猛者で、他にもいろいろな武道を極めているらしい。まぁ、社長のＳＰを務めているんだから、

人を守れるくらい強くなかったらダメだよね。

とはいえ、普段の立ち振る舞いはものすごく優雅だ。

今日も流れるようなしぐさで私を社長室に入るよう促してくれた。

「どうぞ、お入りください」

「失礼いたします。社内報用のインタビューに参りました」

ペコリと頭を下げて、私は社長室に足を踏み入れる。

そのすぐ後ろから竹若さんがピタリとついてきた。

これまでに諸々の打ち合わせを含めて約十回ほど、社長室を訪れている。その度に竹若さんが私の後ろにピタリと立つ。

――いや、あの、私を護衛する必要はないんですけど？

怪訝に思って振り向くと、ニッコリと微笑まれる。

社長とは異なるタイプだけど、竹若さんも相当な美形だ。そんな人に微笑まれたら、クラクラするではないか。

――こっちは美形に免疫ないんだよ！　フェロモン垂れ流すな！　鎖骨、へし折るぞ！

社長のインタビューを三十分ほどで終え、次は写真撮影だ。

今回は俯瞰で撮る予定。そのアングルの写真が見たいというリクエストがあったからだ。

我が社の役員はイケメン揃い。そのイケメンの頂点に立つ社長の写真を求めて、広報課までやってくる女子社員があとを絶たない。だが、そういうときは「万が一、悪用されたら困るから写真は渡せない」と言うように、と部長から指示されている。代わりに社内報に載せる写真のアングルのリクエストを受けつけるようにしたのだ。

「では、社長。写真撮影に移ります」

私はカメラを構えて、ふと気づく。

社長も竹若さんと同じくらいの長身なのだ。だから社長が座っていても、ちっこい私の視点からでは、イメージしている俯瞰の構図で撮れそうにない。

――もっと上から撮りたい……

キョロキョロと辺りを見回すが、踏み台にできそうな物は見当たらない。

「申し訳ございません。今回は俯瞰でのアングルを予定していたのですが、私の身長では無理です。段取りが悪くて恐縮なのですが、踏み台を探してきますので、少しお時間を頂けますか？」

そう言って、急いで社長室を出て行こうとした私に向かって、竹若さんが口を開いた。

「その必要はありませんよ」

落ち着いた声でそう言った竹若さんが、私の腰を両手で掴み、ヒョイと抱き上げた。
一気に視界が広がる。
――え？　ちょっと、なにこれ？
「あ、あのっ、竹若さん？」
ちょっと振り返ると、彼の顔が近い。
――肌、ツルツルだ。至近距離で見てもこんなに綺麗だなんて、羨ましいぞ。
マジマジと顔を眺める私に不愉快な表情も見せず、竹若さんが優しい口調で言った。
「社長はこのあとスケジュールが詰まっておりまして、時間に余裕がございません。ですから踏み台を取りに行くより、この方法が早いかと」
「あ、あ、ああ。そうですね。でも……」
どうしたらいいのか分からなくて、言葉が出てこない。竹若さんの顔を見つめると、彼はニッコリと微笑んでいる。優しげな表情をしているのに、有無を言わさない強引さを感じる。
――恥ずかしいけど、時間がないならしょうがないよね。準備不足だった私が悪いんだし。
「重いでしょうが、よろしくお願いします」
心臓がうるさいくらいに鳴っている。慌てて頭を下げると、彼は切れ長の目を細め、

小さく笑いながら言った。
「小向日葵さんはとても軽いですよ。私がきちんと支えていますから、気にせず存分に写真をお撮りください」
竹若さんの声が真後ろから聞こえる。
――細身に見えるのに、すごい力持ち！　安定感がハンパない！　これが俗に言う細マッチョか！
私はちょっとした感動に包まれつつも、社長の写真を撮り始めた。
「竹若さん、ありがとうございます。ご迷惑をお掛けしました」
無事に写真を撮り終えて、床に下ろしてもらった私は、竹若さんに頭を下げた。
「いいえ、大したことではありませんよ」
少し着崩れたスーツを直しながら、竹若さんが爽やかに答える。
「あの、撮り終えてから言うのもなんなんですが、私を抱き上げるより、背の高い竹若さんが写真をお撮りになればよかったのではないでしょうか？」
私の言葉に、彼はニッコリ微笑んで頷いた。
「確かにそうですね。ですが、写真に関して素人の私では、掲載できるレベルの写真が撮れるかどうか、心許なかったものですから」

「あっ、なるほど」
そんなやりとりを見つめる社長が、笑いを堪えるために口を押さえていたことに、私はまったく気づかなかった。

～その後の社長室～

「このあとの予定はなにもなかったはずだぞ。時間がないとか言って、彼女を抱き上げたかっただけなんだろ？」
小向日葵ユウカが去った社長室。社長が笑いながら竹若に訊ねる。
「ええ、そうですが」
奥にある簡易キッチンで、コーヒーの用意をしていた竹若は、しれっと言ってのける。
「誰に迷惑をかけたわけでもないですし。なにか問題でも？」
コーヒーを差し出しながら言う竹若に、社長の片眉がわずかに上がる。
「お前、あの行動は、ヘタするとセクハラだぞ？」
からかい口調はそのままに、けれど目にはたしなめるような色を滲ませていた。
それでも竹若は動じない。
「ですが小向日葵さんがなにもおっしゃらなかったので、セクハラは不成立ですね」

社長はやれやれと肩を竦めた。
「恋愛事に一切興味のなかったお前の心を動かすなんて、小向日葵くんは侮れないな。もちろん応援はしているが、くれぐれもヘタなことはするなよ。彼女は恋愛慣れしているタイプではないぞ」
竹若は社長の言葉に、かすかに首を傾げた。
「それは聞き入れられませんね。布越しの温もりでは物足りませんよ。素肌で触れ合ったときの喜びは、さっき彼女を抱き上げたときの何倍も大きいでしょう。……そろそろ本格的に動き出しますよ」
瞳の奥にうっすらと危うい光をたたえた竹若を見て、社長はふと思った。この部下の恋は、もしかしたら応援しない方がいいのではないか……と。
「まぁ、俺も片想いをしているから、お前の気持ちは分からなくはないが。しかし、一昨年の大手新聞社主催のフォトコンテストで、お前はグランプリを取ったじゃないか。そんなお前が『写真に関して素人』だと？　小向日葵くんがそれを知ったら、決していい顔はしないと思うぞ」
社長は企み顔で笑ったが、竹若の態度は落ち着いたものだった。表情を変えることなく、スーツの内ポケットから『あるもの』を取り出す。
「ここに、ある方の写真があります。……が、破り捨ててしまいましょう」

写真の女性はこの会社の社員で、社長が絶賛片想い中の相手だった。
「お前、そういうことするなよ！」
文具業界トップ企業の社長が、第一秘書におちょくられて慌てふためくのは、日常茶飯事だった。

3　抱っこ、ふたたび!?

ある日の午後、次号の社内報用の原稿をチェックしていた私は手を止めた。
「この写真、使えないな」
俯瞰（ふかん）で撮った社長の写真の出来が悪い。デジカメで確認したときは問題なかったが、プリントアウトしてみたら、全体的に明るさが足りない。
「んー、どうしよう。撮り直させてもらえるかなぁ」
入稿まで三日ある。多忙な社長に新たな予定を取りつけるのは無理かもしれないけど、できれば、撮り直させて欲しい。
「とりあえず、お願いするだけしてみよう」
社長室に電話をかける。呼び出し音が二回鳴ったあと、竹若さんの穏やかな声が聞こえた。

『はい、社長室です』
「お疲れ様です。総務部広報課の小向日葵です」
『お疲れ様です。どうかなさいましたか？』
「先日撮らせて頂いた社長の写真ですが、全体的に暗い仕上がりになってしまったんです。お手数をおかけして大変申し訳ないのですが、可能でしたら、撮り直しをさせて頂ければと思いまして。社長のご都合はいかがでしょうか？」
『そうですねぇ』
一言呟いたあと、受話器の向こうからパラリと紙をめくる音がかすかに聞こえた。おそらくスケジュール帳をめくっているのだろう。
『今日はこのあと、各支社長との会議。明日からは出張となっております』
「出張からお帰りになるのはいつでしょうか？」
『五日後になります』
――それじゃ間に合わないなぁ。どうしようかなぁ。困ったな……
受話器の向こうで、竹若さんが小さく笑った。
『小向日葵さんさえよろしければ、これから社長室にいらっしゃいませんか？』
「え？　いいんですか？」

突然だけど、撮り直しをさせてくれるのなら、すごく助かる。
「でも、社長は会議前でお忙しいのでは……」
竹若さんの申し出は、願ったりかなったりのものだった。でも、それはあまりにも図々しいのではないかと、腰が引けてしまう。
『かまいませんよ』
私が考え込んでいると、竹若さんの優しい返事が戻ってきた。と、その後ろで『ちょっと待て！　俺、まだ昼飯食ってないんだけど!?』とわめく声が聞こえてくる。
「あ、でも、お時間がないようでしたら、無理に撮り直しをさせて頂かなくても大丈夫です。パソコンで色を調整しますから」
聞こえてきた悲痛な叫び声に、居たたまれなくなった私はそう告げた。
『どうぞお気になさらずに。では、お待ちしております』
竹若さんは穏やかな声でそう言ったあと、静かに通話を切った。
「……電話の向こうで騒いでいたのって、間違いなく社長だよね。いいのかなぁ？」
そう思いながらも、私はデジカメを手に、総務部を飛び出した。

社長室の扉をノックすると、いつものように竹若さんが出迎えてくれた。
「どうぞ、小向日葵さん」

「急なお願いを引き受けてくださって、ありがとうございます」
頭を下げると、竹若さんが小さく笑みをこぼした。
「いえ、なんの問題もありませんよ」
彼が静かな口調で答えると、後方のデスクに座っていた社長が「問題大有りだ！　先に飯を食わせろ！」と文句を言っている。
まずい！　やっぱり撮り直しは辞退させてもらおう。
「あ、あの、写真はこちらでどうにかしますから、社長のお食事を優先なさってください。失礼いたしました」
慌てて退室しようとすると、竹若さんはやんわりと腕を掴んで、私を社長室に引き戻した。
「まあ、そう遠慮なさらずに」
「いえ、社長にご迷惑かけるわけには。もともと私のミスですから」
「社長の意向で社内報に力を入れているのですよ。それに応えようと頑張っているあなたが、気に病むことはありません」
「そ、そうかもしれませんけど……」
困惑して俯いていると、竹若さんがクルリと後ろを振り返った。
「社長。社員に協力することも会社のトップの務めだ、と常日頃おっしゃっていますよ

ね。このようなときこそ、器の大きなところをお見せください」
「そうは言っても、もう三時半過ぎだぞ！　だったら、先に食べさせろ！」
切実な顔で空腹を訴える社長を見て、私はやっぱり退室することにした。
パソコンで修正すると、どうしても色味が不自然になるけど、構図的にはリクエスト通りだから、今回はそれで大目に見てもらうとしよう。
「……竹若さん。私、帰ります」
小さな声で呼びかけると、彼は「ご心配なく」と言い置いて、ふたたび社長に向かって口を開いた。と同時に、凍えるように冷たい声音が室内に響く。
「昼食ぐらいで、いい年した大人が騒ぎ立てないでください。人間、一食抜いたぐらいでは、死にはしませんよ」
竹若さんにそう言われた社長は、グッと息を呑んで黙り込んだ。この間、抱き上げられたときもそうだった。彼の口調はどこまでも穏やかなのに、なぜか逆らうことができない。
「さぁ、小向日葵さん。写真撮影をお願いいたします」
竹若さんが私を促した。
彼の雰囲気のあまりの変わり様に呆気にとられていると、竹若さんがそっと近づいてきた。

「前回と同じ構図でよろしいですね」
「へ？　あ、は、はい。そうです」
「では、どうぞ」
竹若さんが私に満面の笑みを浮かべて、両腕を伸ばしてきた。
「……は？」
「上から写真を撮るのでしたら、以前と同じように私が抱き上げますから」
「い、いえっ。大丈夫ですっ」
私は急いでいったん社長室を出た。そして、廊下に置いていた『ある物』を手にして戻った。
「今回はこちらを用意してきましたので、一人でも大丈夫です」
それは備品庫にあった小さな脚立。これさえあれば、ちっこい私でも俯瞰で撮れる。
ニコリと笑う私を見て、なぜか竹若さんの雰囲気が変わった。
表情は普段と同じなのに、目が笑っていない。社長にお説教していたときよりも、もっと冷たい。
――なんで？
事前の断りなく、脚立を持ち込んだのがマズかったのだろうか。
――そういえば、これ、あんまり綺麗じゃない。

掃除の行き届いている社長室に、薄汚れた脚立を持ち込んだのは失敗だったのかもしれない。でも、床に着く部分は綺麗に拭いてきたんだけどな……

「あ、あの……」

竹若さんはじっと脚立を見つめていた。どうしたらいいのか分からずに立ち尽くしていると、社長が苦笑混じりに声をかけてくれた。

「小向日葵くん。その脚立を使って、写真を撮ってくれ。お互いに時間がないことだし」

「は、はいっ」

社長の許可が出たので、脚立を見つめたままピクリともしない竹若さんの横をすり抜けて、私はそそくさと撮影の準備を始めた。

～その後の社長室～

ユウカが使った脚立が社長室に残されている。『私が備品庫に返しておきます』と、竹若が申し出たからだ。

「おい、親の仇みたいに睨むなよ」

視線だけで脚立を破壊しそうな竹若に向かって、大急ぎで出前のカツ丼に箸をつけながら、社長が声をかけた。

「『堂々と彼女に触れる』という私の楽しみを奪ったのですからね。恨みたくなるのも当然です」

竹若は感情のこもらない声で言い捨てた。

「お前、それは狭量過ぎるだろ」

顔をしかめた社長は、竹若の淹れた緑茶をグビリと飲む。

「なんとでも言ってください。私は彼女に対しては、独占欲の塊ですから」

そう答えた竹若が、ふと表情を緩ませた。

「社長、今から少々外してもよろしいでしょうか？」

脚立から視線を外して、振り返った竹若の目がかすかに笑っている。

「ん？　かまわないが」

急に態度を変えた竹若の様子に首を傾げつつも、社長は許可を出した。すると、竹若は脚立をガシッと掴み上げ、「では、失礼いたします」と丁寧に頭を下げて社長室を出て行った。

その日以降、備品庫にあった小型、中型、大型の脚立、それに踏み台に至るまで、人が上に乗れる物はすべて会社からなくなっていた……

4　好きです……

今日は朝から机の前にずっと座りっぱなしだった。来シーズン用のカタログ写真のチェックが始まったのだ。

カタログに載せる写真は新商品だけではない。撮り直しをした既存商品の写真も含まれるので、その数はゆうに百枚を超える。お昼休みを返上して作業を続けないと終わらない。

「タンポポちゃん、お疲れ様。これ、差し入れだよ」

紙コップに入ったカフェオレを渡される。

「ありがとうございます、三浦先輩」

いったん作業の手を止めた私は、傍らに立った先輩にお礼を言った。

三浦直幸先輩は商品開発部に所属している、五歳上の先輩。写真撮影で度々お邪魔したり、商品の話を聞いたりしているうちに、仲よくなった。

彼はいつも化学の教師が着ているような白衣をまとっている。パッと見はそれほどガッチリしているようには見えないが、学生時代は柔道部の猛者だったらしい。そんな

先輩は、ことあるごとに私に声をかけ、あれこれと差し入れをしてくれる。

カップを受け取り、フゥフゥと息を吹きかけてからコクリと一口飲む。美味しい。ちょっと甘めのカフェオレが、強張っていた体をフワッとほぐしてくれる。

――ちょうど飲みたかったんだよねぇ。

思わず笑みがこぼれた。

すると、三浦先輩がクスッと笑う。

「タンポポちゃんって、本当にカフェオレ好きだよね」

「はい♪」

ご機嫌で返事をしてからもう一口。食事のときはお茶が多いけれど、ちょっと一息入れたいときは、いつもこれを飲む。コーヒーの苦味とミルクのまろやかさが合わさったカフェオレは、私の生活に欠かせない。

程よく冷めたところでゴクゴクと飲み干し、三浦先輩に「ご馳走様でした」とお辞儀をして顔を上げると、いつものように優しく頭を撫でられる。

「どういたしまして。今回は新商品が多いから、写真のチェックも大変だろ？」

「でも仕事ですから。商品開発に比べれば、それほど大変ではないですよ」

そう言いながら先輩を見上げると、さらに頭を撫でられた。

「頑張り屋さんのタンポポちゃん。今度、一緒にご飯食べに行こうか？　奢ってあげるよ」

「ホントですか！　やったぁ～。楽しみにしてます！」
満面の笑みを返すと、「俺も楽しみにしてる」と、先輩が私の鼻の頭を指先でチョンと突っつく。
三浦先輩はこうして度々スキンシップを取ってくる。
初めは先輩の行動に戸惑うことも多かった私だけれど、今ではもう随分慣れた。毎日いろんな男性社員と接しているうちに、少しずつ男性に対する免疫もついてきた気がする。
日本有数の大手企業に勤め、日々仕事に追われる彼らは、おそらく私に小動物的な癒しを求めているのだろう――例えば、仔犬とか、仔猫とか、仔ウサギとか、そういった類の。
だから、あんまり怯えることもないのかなと考えたりもする。
なにかの折に、留美先輩にそんな話をしたことがある。そのとき、留美先輩は私の顔を見つめながら、『この子に彼氏ができる日は来るのかしら……』とポツリと呟いていた。
あれってどういう意味だったんだろう？　いまだによく分からない。

昼休みも終わり、三浦先輩も自分の部署に戻って行ったので、作業を再開した。
レイアウトや、写真の光の当たり具合などをチェックしていると、あっという間に三

時になった。
ずっと下を向いていたので、肩と首がかなり凝っている。やれやれと肩を回していたら、留美先輩が角2封筒を持ってきてくれた。
「社内報の下刷りが届いてるわよ」
「ありがとうございます」
腕の動きを止めて受け取り、さっそく確認してみる。
――やっぱり、社長の写真は撮り直して正解だったよ。
思った以上の仕上がりだった。
「じゃ、これから社長に確認取ってきますね」
アポを取ったあと、届いたばかりの下刷りを手に、私は社長室に向かった。

社長室の扉をノックすると、出迎えてくれたのは、いつものように竹若さんだった。
「お疲れ様です、どうぞ」
「失礼します」
頭を下げて中に入ると、社長は電話中だった。
「申し訳ございません。つい先ほど、ドイツ支社長から電話が入りまして。しばらくかかりそうなんです」

竹若さんが、申し訳なさそうな表情で言う。
「私は時間に余裕がありますので、大丈夫です」
そう答えると、彼はホッと表情を緩めた。
「では、お飲み物をご用意いたしますので、こちらのソファにかけてお待ちください」
言われるままに腰を下ろすと、竹若さんが簡易キッチンへと向かう。それから程なくして私の前に置かれたのは、カフェオレだった。
「え？」
カップの中身を覗き込んだ私は、少し戸惑った。
こういうときって、大抵コーヒーが出てくるのではないだろうか。もしくは、なにが飲みたいか訊ねるとか。だけど彼はなにも訊かなかった。私もなにも言わなかった。それなのに、当たり前のようにカフェオレが出てきた。
——どうして？
びっくりして言葉を失っていると、「カフェオレはお嫌いでしたか？」と静かに声をかけられた。私はブンブンと首を横に振る。
「嫌いだなんて。私、飲み物の中で、カフェオレが一番好きなんです」
ニッコリ笑って答えると、竹若さんも微笑み返してくれる。
「小向日葵さんは、カフェオレがお好きなのですか」

「好きです」
そう答えると、彼の目が優しく細められた。
「お好きですか？」
「はい、好きです」
「お好きなんですね？」
「……好きですよ？」
——なんで、何度も同じことを訊いてくるんだろう。それに、ひどく嬉しそうなその顔はなに？
心の中で首を傾げながら、意味の分からないやり取りを何度か繰り返した。そのあとカップを取り上げ、フゥフゥと静かに息をかけた。
竹若さんに視線を向けると、切れ長の目に笑みが浮かんでいる。
「先日、大変美味しい牛乳を知人に頂きましてね。それでせっかくなので、カフェオレにしてみたのですが、お味はいかがですか？」
一口飲む。美味しい！　いつも飲んでいるものとは比べものにならない。
「美味しいです！」
思わず叫んでしまった。ほろ苦さとコクが、これ以上ないってくらいベストマッチ。甘さもちょうどいい。

「今までいろいろなカフェオレを飲んできましたが、このカフェオレが一番美味しいです」

素直に感想を述べると、竹若さんはとても嬉しそうに微笑んだ。

程なくして電話を終えた社長に下刷りを渡し、OKをもらった私は、総務部へと戻った。

～その後の社長室～

「ったく、お前もよくやるなあ。小向日葵くんがカフェオレを好きなのを知って、わざわざあの牛乳を取り寄せたんだろ？」

竹若が頂き物といったあの牛乳は、実はさんざん調べ上げた末にようやく手に入れた一品だった。もちろんユウカのために取り寄せたのだ。

「ちょっと前まで『コーヒーに牛乳を混ぜるなんて邪道だ』って言ってたじゃないか。まったくすごい変わりようだなぁ。それに、『冷ます口元が可愛い』とか思ってたんだろう？　彼女は気づいてなかったが、お前の顔、すげぇ緩んでたぞ」

ニヤニヤと意地悪く笑いながら、なおも言葉を続ける。

「おまけに何度も小向日葵くんに『好き』と言わせやがって。あれはお前が好きだと言ったんじゃなくて、あ・く・ま・で・も、カフェオレが好きだってことだからな。分かってるだろうけど、勘違いするなよ～」

竹若をからかう社長は、楽しそうに肩を震わせている。

そんな社長を見て、竹若も小さく笑う。

「ふふっ、分かっておりますよ。……そうそう。今後、社長のコーヒーには牛乳ではなく、高純度のトリカブトを混ぜて差し上げますね」

竹若は微笑みを浮かべていたが、目は本気そのものだった。

5　プリンと間接キスと

ある日の午後、部長のおつかいで社長室へと向かった。

ところが、社長は不在で、応対してくれた竹若さんが、「ただ今社長は緊急会議のため、席を外しております」と教えてくれる。

まぁ、あずかり物を届けに来ただけだから、本人がいなくても問題はない。

「では、こちらを社長にお渡しください。失礼いたしました」

私がその場をあとにしようとすると、竹若さんから「お待ちください」と声をかけられた。

「先程打ち合わせに見えた取引先の方から、ブルーフラワーのプリンを頂きましてね」
その言葉に、私の耳と胃袋がキュピーンと反応する。
ブルーフラワーといえば、この界隈で今一番人気のある洋菓子店だ。完全手作りのプリンは販売数が限られており、おまけに値段も結構高い。
憧れの店名を耳にして、思わず足を止めた。
「社長と秘書たちの分を引いても、一つ多いので。余り物と言うと言葉は悪いですが、よろしければ召し上がりませんか？」
「いいんですか？」
「はい。一つだけどこかに差し入れるわけにも行きませんし、それに、せっかく頂いたものを余らせてしまうのもどうかと思いまして。小向日葵さんが召し上がってくださると、こちらとしても助かります」
断る理由など、どこにもない！
「ありがとうございます。頂きます！」
「では、こちらでお召し上がりください」
私は促されるままに、ソファへ腰かけた。
目の前のテーブルには、ブルーフラワーの名前が入った箱が置いてある。
――この中にプリンが！　取引先さん、ありがとう！　責任持って、美味しく頂きます！
顔も名前も知らない相手に心の中で感謝していると、竹若さんが私の隣に腰を下ろした。

――え？　なぜ!?
ソファは向かいにもあるのに、どうしてピタリと私にくっついてくるの？
「た、竹若さんっ」と困惑気味に彼の名を呼ぶと、「スプーンをどうぞ」と差し出された。
私は思わず素直に受け取る。
「ありがとうございます」
――じゃ、なくって。
「あ、あの。こんなに近くに座らなくてもいいと思います」
「座ってもいいと思います」
「は？」
その切り返しに言葉を失った私は、竹若さんの顔を思わず見つめる。
「それより頂きましょうか」
竹若さんは悪びれることもなく、ニッコリと微笑んでいる。どうあっても隣から動いてくれる気配がないので、私は少しだけ座る位置をずらして彼から距離を取った。そんな私に、竹若さんはプリンの入った箱を差し出す。私との距離をジリジリと詰めながら。

——いったいなんなの？

せっかくゆったり座れるソファなのに。頭の中に「？」をいっぱい浮かべている私を見ながら、彼は箱の蓋を開けた。

「カスタードプリンとチョコレートプリン、どちらになさいますか？」

——ああ、そうか。箱の中身を見せようとして、隣に座ったんだ。

竹若さんの行動に納得した私は、箱を覗き込んだ。

中にはカスタードプリンが三つ、チョコレートプリンが二つ入っていた。どちらのプリンにも、色鮮やかなフルーツと生クリームが綺麗にトッピングされている。

——うわぁ、どっちも美味しそう。どっちも食べたい！

しかし二つ貰うわけにもいかず、さんざん迷った結果、カスタードプリンを選んだ。

「では私はチョコレート味にしましょう。さぁ、小向日葵さんも召し上がってください」

彼は箱から自分の分のプリンを取り出して、スプーンを取った。

竹若さんが、隣から移動する気配はまったくない。

——なんで？　どうして竹若さんは移動しないの？

私は混乱し、左手にプリン、右手にスプーンを持ったまま固まってしまった。

竹若さんが首を傾げる。

「どうしました？　召し上がらないのですか？」

彼は子供みたいに無邪気な表情をして、私を不思議そうに眺めている。

「なんでもないです。頂きます……」

私はこっそりとため息をついて、プリンを掬って一口食べた。

評判がいいだけあって、そのプリンはものすごく美味しかった。滑らかな口溶けなのに、しっかりと食感も楽しめる。コクがあるのにクドくない。甘さもちょうどよく、トッピングとのバランスが絶妙だ。

——美味しいーーー！　こんなに美味しいプリン、初めてだ！

思わず笑みがこぼれて、私はどんどん食べ進める。このカスタードプリンも抜群だが、チョコレートプリンも食べてみたい。

——いつか絶対買いに行こう。

心の中で決意していると、竹若さんの穏やかな声が聞こえた。

「小向日葵さん。チョコレートプリンの味も気になっているのでしょう？」

「あ、え、ま、まぁ……」

バレている。自分の食い意地を見抜かれて恥ずかしくなった私は、ちょっとだけ俯いた。そんな私を笑うことなく、竹若さんはゆったりとした調子でこう言った。

「味見してみませんか？」

竹若さんは自分のスプーンでチョコレートプリンを掬うと、ゆっくりと私にそれを差

し出した。
「はぁっ!?」
「どうぞ。チョコの風味が最高ですよ」
竹若さんはニコニコしながら、私の口にスプーンを近づけてくる。
——いやいやいやいや！　それはないでしょ！
友達と缶ジュースを回し飲みしたことはある。家族で鍋料理をするときは、直箸で鍋をつつくのにも抵抗はない。しかし、友達でも家族でもない竹若さんが使ったスプーンを口にするのは、無理！
——そりゃ、プリンは食べたいよ。でもね、いくら私の食い意地が張っているからって、それはやっぱり無理ってもんだよ。
「い、いえ、さすがに、それはちょっと、ははは……」
愛想笑いを必死に浮かべて少しずつ後ずさるが、私が動いた以上の距離を動いて竹若さんは近寄ってくる。
「どうしてですか？　私はなんの病気も持っていませんよ。ですから、安心してください」
「はい。まあ、でも」
……そういうことじゃないだろう！
気にしているのは竹若さんと、その、えと……か、間接キスをしてしまうことなのだ！

竹若さんはそういうことって、気にしないのだろうか。私が意識しすぎているだけ？
思わず、彼の口元に目が行ってしまった。
竹若さんの唇は、普段よりも口角が上がっていて、ひどく楽しそうに見える。その唇に視線が釘づけになっていると、私を見つめたまま竹若さんは笑みを深めた。
そしてわずかに覗かせた舌先で、自分の下唇の右端をゆっくりと舐めた。私は彼が醸し出す、淫靡なムードに思わず酔いしれそうになった。
「チョ、チョコレートプリンは、そのうち自分で買いに行きます。な、なので、今は……」
——『いりません』
と、言おうとした私の唇に、竹若さんが差し出すスプーンがチョンと触れる。
——ひぃぃぃぃっ！
私は仰け反った。
「遠慮なさることないですよ」
目を細めて、竹若さんがズイッと追ってくる。
私はソファの端まで追い詰められてしまい、これ以上は下がれない。肘掛が背中にめり込んでいた。
——ど、ど、どうしたらいいの!?
半泣きになった私は、彼を見つめることしかできない。そんな私を竹若さんは嬉しそ

うに見つめ返して、切れ長の目をさらに細めている。
「小向日葵さん、口を開けてください。さぁ……」
軽く触れてから一度遠ざかった小さなスプーンが、ふたたび私の口元に近づいてきた。同時に、竹若さんが私に覆いかぶさるように迫ってくる。逃げ場を失った私の唇を、竹若さんがスプーンでゆっくりとなぞった。スプーンが下唇の輪郭に沿って、静かに右へ左へと小さく動く。チョコレートの芳醇な香りと竹若さんの美し過ぎる笑顔が一緒になって押し寄せてきて、クラクラと眩暈がした。
「小向日葵さん……」
有無を言わさぬ空気に負けて、私はおずおずと口を開いた。

その瞬間……
「やっと会議が終わったぁ。ドイツ支社の件は、頭が痛いなぁ」
と、ぶつくさボヤキながら社長が入ってきた。
ハッと我に返った私は、残っていた自分の分のプリンをものすごい勢いでかき込み、ゴクン、と飲み下す。（※プリンは飲み物ではありません）
「ごちそうさまでしたっ。ではっ、失礼いたしますっ！」
社長と竹若さんに頭を下げて、脱兎のごとく社長室から逃げ出した。

――竹若さんってなんなの？　なんなのっ!?
せっかくのプリンをじっくり味わえなかったことを後悔する気持ちより、彼に対する言いようのない恐怖のほうが勝っていた。

～その後の社長室～

会議資料に改めて目を通しながら、社長は呆れたようなため息をつく。
「竹若、社長室でいかがわしいことをするなよ」
「いかがわしくないですよ。私のスプーンで、小向日葵さんにプリンを食べさせようとしていただけです。誰かさんのせいで邪魔されてしまいましたがね」
ユウカと自分の食べ終えたプリンの容器を片づけ、テーブルを拭いている竹若がサラリと答えた。
「涼しい顔して変態発言をするな……」
竹若の言葉を聞いて、社長の整った顔は盛大に引きつった。
「写真撮影のときといい、今といい、最近のお前の行動は露骨過ぎる。気をつけろ」
「はいはい、かしこまりました」
まったく改める気配の無い竹若に、社長はふたたび深いため息を漏らす。

「まぁ、お前のことだから、騒ぎになるようなことはしないと思っているがな。それで、俺のプリンは？」
「冷蔵庫に冷やしてあります。コーヒーも一緒にお出ししましょうか？」
「ああ、頼む」
頷いた竹若は、奥の簡易キッチンへ向かった。しばらくすると、コーヒーカップとプリンを載せたトレイを手に戻ってくる。
「お待たせいたしました」
優雅なしぐさで社長のデスクにコーヒーカップを置く。
ついでその横にカスタードプリンが置かれた。と同時に社長は目が点になる。
「なっ、なんだこれ!?」
フルーツと生クリームで美しく飾られていたプリンは、その面影を一切残していなかった。ぐっちゃぐちゃに掻き混ぜられている。相当激しく撹拌されたらしく、若干泡立ってすらいた。
「先ほど頂いたプリンですよ。なにか問題でも？」
いつものように細められた竹若の瞳は、まったく穏やかではなかった。

6　ユウカの誕生日

七月に入ると待望のボーナスが支給される。先輩たちがはしゃいでいる中、私は今月分の社内報とバラを一輪持って、社長室のドアをノックした。
今日も出迎えてくれたのは竹若さん。
実はこれまで、第二秘書と第三秘書の方には一度も会ったことがない。
お姉さま方の情報によると、彼らもなかなかにいいオトコらしい。
ぜひともお顔を拝ませてもらいたいところだけれど、二人とも対外的な仕事が多く、社内で落ち着いて仕事をする時間は少ないようだ。
お二人にも会ってみたいと、なにかの折に話したとき、そのように竹若さんから説明された。ちなみに、第二、第三秘書のスケジュール調整は、第一秘書の竹若さんの仕事らしい。
今度社内報で、二人の特集を組んだら、お姉さま方が喜ぶかもしれない。取材となれば、彼らも少しくらい時間を取ってくれるだろう。前もって、竹若さんに予定を調整してもらおう。

我ながら、ナイスアイディアである。

丁寧にお辞儀をしてから、社長に社内報を差し出す。それから、一輪のバラの花も。

「社長、お誕生日おめでとうございます」

そうなのだ。本日七月七日は、社長の三十一回目のバースディ。

社長のイメージに合わせて、真紅のバラを買ってきた。男の人に花を贈るなんておかしいかもしれない。でも、この社長には絶対似合う。

私の言葉に、社長は顔を綻ばせた。

「ありがとう、綺麗な色だね。それに、とてもいい香りだ」

——おおっ。バラの花の香りを楽しむ社長の後ろに、ベルサイユ宮殿が見える！

プレゼントが喜ばれたことに安堵していると、竹若さんが話しかけてきた。

「小向日葵さんの誕生日はいつですか？」

「あ、私もゾロ目なんですよ。八月八日です」

「どっかのテレビ局の記念日と同じで覚えやすいな」

——なんですか社長！　その返しは！　そんな覚え方をするなら、忘れてくださって結構です！

社長をこっそり睨んでいると、竹若さんが静かに口を開く。

「八月八日は『鍵盤の日』と言われるそうですよ。ピアノの鍵盤数が八十八あることにちなんだとか。小向日葵さんの誕生日は、とても芸術的な日なんですね」

——なんて紳士的な返しだ！

感激していると、竹若さんがニッコリと笑いかけてきた。

「小向日葵さんの誕生日を知り得たのもなにかの縁です。もし、よろしければ当日、食事でもいかがですか？『シェ・カミノ』の支店が私の家の近くにできたんですよ」

「えっ、本当ですかっ」

なんて魅力的なお誘いだろう。胃袋が喜びまくっている！

シェ・カミノは、イタリアンをメインにした洋食店だ。けれど『美味しいものなら、ジャンルにこだわらない』というコンセプトをもとに、イタリアンのみならずフレンチをベースにした料理、ときには和食や中華のテイストを取り入れた料理も並ぶ、お洒落で美味しい人気のお店である。

その本店は私の家から車で二時間以上かかるところにあって、何年か前に両親に連れて行ってもらったきり、一度も訪れていない。でも、あのお料理の味は、今でもはっきり覚えている。あのとき食べたカルボナーラは、時折夢に出てくるほどだ。

——そのシェ・カミノでご馳走してくれるなんて！　神様、仏様、竹若様！

先日の『プリン間接キス（未遂？）事件』で味わった恐怖も忘れて、私は竹若さんに

抱きつきそうになった。が、お誘いに乗れないのが残念だ……

「大変嬉しいお話ですが、当日は総務部の人たちがお祝いしてくださるんです。部の親睦会も兼ねて」

留美先輩が幹事になって、今からお祝いパーティーに向けて張り切ってくれているのだ。

それにどうやら部長も参加してくれるらしいので、予算面でも大いに期待できる。きっと美味しい料理とデザートがお腹いっぱい食べられるに違いない。

「そうですか。それでは仕方ないですね」

彼はほんの少し残念そうな顔で微笑んだ。

7　びっくりドッキリ昼休み

七月に入ってから、本格的な暑さが毎日続くようになった。

そんな中でもお昼休みは、相棒の一眼レフカメラとお弁当を持って、会社近くの公園へ足を向ける。

確かに日なたはうだるような暑さだけれど、日かげに入れば風が気持ちよくて、なか

なか快適なのだ。夏生まれだからか、私は暑さには強い。

今日も公園で一番大きな木の下のベンチに座って、お弁当を食べる。

「いっただきまぁす！」

パチンと手を合わせて、お弁当箱の蓋を開ける。

ほうれん草の胡麻和え、鰯の竜田揚げ、筑前煮、焼き海苔を巻き込んだ厚焼き玉子、そして真っ赤な小梅が載ったご飯。二十歳のＯＬが食べるお弁当にしては、ちょっと地味かもしれない。でも、こんな昔ながらの和食が好きなのだ。新聞記者として忙しく働く両親に代わって、小さい頃、私の面倒を見てくれたのは祖母だった。

私は料理も嫌いじゃないし、洋食も中華もそれなりに作れるけれど、食べてホッとするのはおばあちゃん直伝の懐かしい和食。カラリと揚げた鰯の竜田揚げをパクリ。続いて胡麻和え、煮物、卵焼きを次々に口に運ぶ。

「うん！　我ながら、よくできてるなぁ」

自慢の料理が詰まったお弁当を綺麗に平らげて、冷たい麦茶をゴクリと飲み干すと、私はカメラを構えた。

ファインダーを覗き、自分の手でピントを合わせていく。ファインダーの向こうのぼやけた景色が少しずつ、少しずつ、クリアになってゆく。

そのとき私は、音も聞こえず、感覚も研ぎ澄まされ、無の世界に没入する。

そして、ただ、世界を切り取る瞬間だけを待つ。

――……よし。

私はシャッターにかけた右の人差し指に力を入れた。

次の瞬間、いきなり竹若さんの顔が視界に飛び込んできた。

「うわぁっ！　っと、カ、カメラッ」

カメラを落としそうになって、慌てて掴む。

「うはぁ、よかったぁ！」

ホッと胸を撫で下ろすと、竹若さんがすまなそうに眉を寄せた。

「驚かせて申し訳ございません。何度か声をかけたのですが」

「い、いえ。こちらこそ、気がつかなくてごめんなさい。でも、珍しいですね。竹若さんがこんな所にいるなんて。……どうしたんですか？」

そう訊ねると、竹若さんはごく自然なしぐさで私の傍らに腰を下ろした。ベンチは公共の物だから、座るなとは言えない。でもこの暑い中、なにもピタリとくっついて座る必要はないんじゃないか？

ほんのちょっとだけ体をずらして、私は竹若さんから距離を取った。竹若さんはそんな私の動作には気がつかない様子で、問いかけに答えてくれた。

「社長に頼まれて、そこのコンビニまでお使いに出たんですよ。それで、一体なにを撮っていたんですか？」

「噴水の水が噴き出る瞬間を撮りたいと思って……」

私は噴水を指差した。

この公園の中央にはかなり大きな噴水が設置されている。決まった時間に水が噴き出し、ダンスを踊るように水が舞う。その噴き出す一瞬をとらえようとしていたのだ。

私がそう説明すると、竹若さんが困った表情をした。

「そうでしたか。邪魔をしてしまって、本当に申し訳ございません」

「あっ、気にしないでくださいっ。また次のチャンスに撮ればいいですから」

「そうですか？」

「はい。こうやってカメラを覗いて、切り取られた世界を眺めるのが好きなんです」

私はカメラを正面に構え、さっきと同じようにファインダーを覗き込んだ。

すると突然、竹若さんが私の右頬に顔を寄せてきた。スッベスベの彼の肌が、ややふっくらした私のホッペにピッタリとくっつく。

「どひゃぁっ！」

年頃の女性とは思えない悲鳴が口から飛び出した。

「な、な、な、な、なんですか!?」

カメラを抱えたまま、私はズザザッとベンチの上で後ずさりした。

――なに、今の!?　どういうこと!?　私のホッペと竹若さんのホッペが密着するなんて、ありえない!!

滝のように汗が流れる。

慌てふためく私とは対照的に、竹若さんはゆっくりと前髪をかき上げた。

「小向日葵さんが見ている世界がどんなものなのか、とても気になったので。すごくいいお顔をされていましたから」

「はぁっ？」

カメラの中の世界が気になったからって、あんな狭いファインダーを一緒に覗けるわけがないではないか。この人の思考回路って、どうなってるの？

呆気に取られている私を見ながら、彼はスッと立ち上がった。

「そろそろ戻らなくては。では、お邪魔しました」

私が正気に戻る前に、彼はにこやかな笑顔を残して去っていった。

8　ユウカのお願い。竹若の願望。

社長の誕生日から一週間後、私は『ある決意』を胸に、社長室に電話を掛けた。

二回の呼び出し音のあと、電話が繋がる。

『はい、社長室です』

竹若さんの優しい声が聞こえてきた。

いつもは心が和む彼の声だが、今日はどうしても緊張してしまう。心の中で『落ち着け、私！』と気合いを入れてから、口を開いた。

「お疲れ様です。総務部広報課の小向日葵です」

『お疲れ様です。本日はなにも予定は入っていなかったような……』

不思議そうに、竹若さんが訊き返してきた。

仕事は完璧にこなす彼だから、スケジュール管理に漏れがあるはずはない。竹若さんが知らない社長の予定は存在しないのだ。でも口調が拒絶的な感じではなかったので、私は恐る恐る話を続けた。

「いえ、今日はお願いがありまして……。あのっ、実はですね、社員からの要望もありまして、第二、第三秘書の方に社内報掲載用のインタビューをさせて頂きたいんです。それで、竹若さんにお二人のご都合を伺いたくて、お電話しました。お二人のスケジュールは竹若さんが管理されていると聞きましたので」

ここまでは一気に言うことができた。女子社員の希望、そして私の希望でもある、この企画の実現に向けて、なにがなんでも竹若さんにＯＫを貰わねば。

——言った、言っちゃった！　それで？　それで、どうなのよ！

ギュッと受話器を握りしめ、息を潜めて返事を待った。

『そういうことですか。小向日葵さんが私に個人的な用があるのかと思いまして、少し喜んでしまいました』

電話の向こうから、少し気落ちした声が聞こえてきた。

「え？」

——え？　どういう意味？

混乱して言葉が上手く出てこない。

「あ、あの……、竹若さん？」

呼び掛けてみると、いつもと変わらない穏やかな声が聞こえてきた。

『いえ、なんでもございません。二人がインタビューを受ける時間を設ければよろしいのですね？』

「はい、お願いできますか？」

もともと来月号のインタビューは別の企画を考えていた。が、なんと取材相手が交通事故に遭い、空きができてしまったのだ。

本来、インタビューを申し込む場合は、余裕を持たせて入稿の二ヶ月前に先方にアポを入れる。だから、締め切りを約二週間後に控えた今からでは、断られる可能性の方が

高かった。

でも、彼らのインタビューを断られたら、記事に空きができてしまう。

「突然のお願いで大変申し訳ありませんが、いかがでしょうか？」

ドキドキしながら待っていると、気さくな声が聞こえてきた。

『小向日葵さんのお願いを、断ることなどできませんよ。社内報に関しては、社長からもできる限り協力するように、と申しつけられておりますしね』

いつものように穏やかな声で返ってきた言葉に嬉しくなる。これで第一段階はクリアだ。

「急にこんなことを申し上げて、本当に申し訳ありません。インタビューはお二人のご都合に合わせますので……」

そう竹若さんに言うと、彼はこんな提案をしてきた。

『こういったことは、早く決めてしまったほうがよろしいかと思います。今から日程の打ち合わせをいたしませんか？』

「へ？　……今からですか？」

『はい。このあと、社長は私用で早退なさいますので、終業時刻まで私の時間が空きます。小向日葵さん、お時間がございましたら、社長室にいらして頂けますか？』

今の私が抱えている仕事に、さして差し迫ったものはない。でも、わざわざ竹若さん

と直接会って話さなくてもいいだろう。

「時間は空いていますが、私はこのまま電話で打ち合わせしてもかまわないですよ。もしくは、都合のつく日程を後日教えて頂けますか？　その方が、竹若さんに余計なお手間を取らせないでしょうし」

私がそう言うと、受話器の向こう側から、笑いを含んだ声が聞こえてきた。

『実はですね、今日もお客様から頂いたお土産が一つ余りまして。どうしようかと思っていたら、タイミングよく小向日葵さんからお電話を頂いたものですから、よろしければ差し上げようかと。紅月堂の豆大福、お好きですか？』

――ああ！　またしても魅力的なお誘いが！

「大好きです！　了解しました。今からすぐに、そちらへ向かいます！」

『かしこまりました。では、お待ちしております』

迷いなく答えた私に、竹若さんがクスリと笑って、静かに通話が切れた。

受話器を戻した私はニマニマと頬を緩める。紅月堂は知る人ぞ知る老舗の和菓子屋さんで、老若男女を問わずファンが多いのだ。

「やったぁ～！　豆大福、ゲット～♪」

私は筆記用具を手に、総務部を飛び出した。

～その頃の社長室～

「あとはよろしくな。竹若も急ぎの仕事がなければ、たまには早く帰れよ」

Yシャツ姿でネクタイをしめ直していた社長は、竹若に声をかけた。すると竹若は、スーツの上着を差し出しながらそっと微笑む。

「いえ、私はこれから小向日葵さんと打ち合わせがありますから。しばらく社長室を使わせて頂きたいのですが、よろしいでしょうか？」

ネクタイから手を離した社長は、わずかに眉をひそめる。

「『打ち合わせ』に使うならかまわない。……くれぐれも言っておくが、ここは社長室だ。ピンクなホテルじゃない。それを絶対に忘れるなよ」

鋭い視線を投げかけたにもかかわらず、竹若は飄々と答える。

「最近、疲れているせいか、物忘れが激しくて……。つい今しがた聞いた話を覚えていないことがしばしばございましてね。本当に困ったものです」

それを聞き、社長は顔を真っ青にして竹若に掴みかかった。

「頼むから！　頼むから、お前の欲望をここで満たそうとしないでくれっ！　奥の仮眠室は絶対に立ち入り禁止だからな！」

「ええ、仮眠室には入りません。……ベッドを使わずともなんとでもなりますから、仮眠室は必要ありません」

涼しい顔で言ってのける部下に、社長の顔から血の気が失せた。

「打ち合わせの意味、分かってるよな⁉」

竹若は大きく頷く。

「ええ、もちろん。彼女を想って『打ち』震えるこの気持ちを、肌を『合わせ』て、相手に伝えることですよね？」

「たーけーわーかーーーっ！」

真っ白な顔で竹若の肩を掴んで、ガクガクと前後に揺さ振るが、返ってきたのは素っ気無い答えで――

「社長、お時間ですよ。先方を待たせては大変です」

思わず竹若の肩を掴んだが、彼はその手をベリッと剥がし、社長を扉の外へと追いやった。

9　おやつタイムのちパニック

喜び勇んで社長室の扉をノックすると、爽やかな笑顔の竹若さんが出迎えてくれた。

「こんにちは」

「こんにちは、小向日葵さん。どうぞ、お入りください」

この前と同様、奥のソファセットのテーブルの上には箱が置いてある。

――あの中に私の豆大福が入っているのね♪（※あれは社長への手土産です）

足取りも軽く、促されるままにソファに腰を下ろした私の前に、緑茶が置かれる。

そして、彼は自分用の湯飲みをテーブルに置くと、今日も私の隣に座った。

――なぜだ？　なぜ、彼はわざわざ隣に座る？

「あの……」

チラリと竹若さんの方を窺うと、ニコッと微笑まれた。

「お手拭きをどうぞ」

お手拭きを差し出されて、素直に受け取る。

「ありがとうございます」

——って、これじゃ、この前と同じ展開じゃん！

私は気を取り直し、思い切って口を開いた。

「竹若さん。どうして、こちらに座るんですか？」

「普段、私の座る定位置がここですから、つい」

苦笑いを浮かべながら竹若さんはそう答える。

——そうか、ここは竹若さんの場所なのか。それなら私が反対側のソファに移動すればいいんだ。

と立ち上がった瞬間、クンッとブラウスの裾がなにかに引っ張られた。

「うわぁっ！」

体勢を立て直せず、ボスン、とソファに沈み込んでしまった。

——引っ掛かるようなものはなかったはずなのに、どうして？

私はキョロキョロと周囲を見回した。

「さ、食べましょうか」

竹若さんがニコニコと微笑みながら、皿に載せた豆大福と菓子楊枝を差し出してきた。

移動するタイミングを逃した私は、諦めて竹若さんの隣で縮こまる。

モヤモヤしつつも、渡されたお手拭きでしっかり手を拭い、大福の載った皿を手で持つ。でも、大福の皮があまりにモチモチしているせいで、菓子楊枝では上手く切れない。

立ち読みサンプルはここまで

——どうしよう。

「こういうものは手で持ってかぶりついた方が美味しいと思いますよ。私の他に誰も見ておりませんし、気になさらないでください」

同席している竹若さんがそう言うんだから、気を遣わなくていいよね。

「では、遠慮なく。頂きます」

大福を指でそっとつまみ上げ、私はパクッと食いついた。

赤ちゃんのホッペを思わせるような柔らかいお餅。中の餡は最上級の国産小豆と和三盆を使っているということで、上品な甘さに仕上がっている。ちょっと硬めに茹でられた赤エンドウの塩味が全体を上手くまとめていて、まさに絶品！

——美味しい～♪　幸せ～♪

五センチ大の豆大福は、みるみるうちに私の胃袋へ収まっていった。

大福に合わせて、少し渋めに淹れられた煎茶がこれまた絶妙で、「はぁ」と、思わず至福のため息がこぼれ出る。

「満足して頂けたようですね」

器用に菓子楊枝で大福を食べ終えた竹若さんが、私の顔を嬉しそうに眺めていた。

「はい。おかげで素敵なおやつタイムになりました。ありがとうございます」

ニコッと微笑んでお礼を言うと、彼が私の口元に右手を伸ばしてくる。